少女の咎と世界

萩原和輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女の咎と世界

【Ｎコード】
Ｎ７０７１Ｆ

【作者名】
萩原和輝

【あらすじ】
ほんの少し魔法が使える、そんな世界。鴻上直樹（こうがみなおき）は魔法が得意な女子生徒に出会う。なぜか人と付き合うのを拒否するが…？

prologI—ether—

少女は言った。

世界は神様が造った物語だと。

誰が死んで息絶えたとしても、それはもう決まっていたことだと。

運命とか必然とか未来のことじゃない。

もう決まっていた。

過去形にして完成なんだと。

そんな話を俺は聞いた。

少女はつくった笑顔をしていた。

——私が神様の咎を受けよう

――誰も悪くはないんだから

――だから私の分までみんなは幸せに

まるで小さな頃に聞くようなおとぎ話。

ただ、矛盾で構築された世界の中で少女は弱く笑っていた

※※※

「！？」

目が覚める。

「ん…。寝ちまってたか…」

夕陽が差す教室。

時計は五時丁度を示している。

周りを見渡すが、みんなは帰ったのかもういなかった。

「5時だから当たり前か…ってあれ？」

俺の背中に制服の上着がかかっていた。
誰だ？
確かにこの時期は寒い。
「でも、今は持主の方が寒いんじゃないか……？」
しょうがない、と席を立った瞬間だった。
「あ、目が覚めましたか？」
教室に女子生徒が入ってきた。
その生徒は明らかに薄着。
一目で背中にかかっている制服の持ち主だとわかった。
「悪い……。これ君のだろ？」
背中の制服を丁寧にたたんで渡した。
「ありがとうございます。やっぱり少し寒かったんで……」
女子生徒は苦笑い。
「いや、本当に悪かった…」
俺は深々と頭を下げた。
「そ、そんなにかしこまらないでください。クラスメートですよ？」

「クラスメート？」

はて…？

こんな子いたっけか？

「知らなくても無理ないですね。明日から、私だけこのクラスに変わるんですから」

「え？君だけ？」

「はい。前のクラスでうまくいってなかったんです…。たぶんこのクラスでも……」

いじめか？

容姿や性格を見る限り、いじめられるような奴じゃないが……

「……」

「す、すいませんっ！重っ苦しい話して…」

「あ、いや……」

気まずい……

「お、俺は鴻上直樹（こうがみなおき）っていうんだけど……、名前は？」

「……明日まで秘密です」

「そっか…」

「じゃ、私はこれで…」

女子生徒は上着を着るとドアの方へ向かっていった。

「……」

「あ！言い忘れてました！」

「っ！！」

女子生徒が急に声を出すので驚いてしまった。

「な、何？」

「明日から私に関わらない方がいいですよ。というか関わらないでくださいね？」

「は？」

「あと、おまじないをさせて下さい……」

「……？」

女子生徒は手を俺にかざす。

「簡易魔法くらいなら自分でできるけど……」

たぶんここの生徒でも１０人に一人くらいはできる。

「このおまじないは私がやらないと意味ないんですよ」

「へぇ」

人を選ぶまじないなんて聞いたことがないが、深く追求しないでおく。

「それじゃあいきますよ……」

いつでもどうぞ、と頷く。

すると女子生徒の手が光を纏う。

「ｅｔｈｅｒ（エーテル）……」

女子生徒がそう呟くと、光が舞い散った。

「……終わり？」

「はい」

ずいぶん簡単なまじないだったな……

でもエーテルって……

「…なぁ、エーテルって……おいっ！！？」

気付くとその生徒はドアの所まで移動していた。

「さようなら、鴻上直樹くん」

「ちょっ……」

その女子生徒は笑顔で出て行った。

俺は、その笑顔がどうしようもなく怖かった。

prolog2―knows―

「ん……」

カーテンの隙間から光が差していた。

「朝…か…」

時計を確認。
――6時21分
目覚ましが鳴る前に起床した。

実は親と離れて、このアパートに住んでいる。
仲が悪いわけじゃなく、ただ何ごとも経験ということで。
必然的に1人暮らしになるので家事も少しずつ慣れてきた。
そうは言っても、朝はあまりやる気が起きないので手抜き。
テレビを見ながら菓子パンをかじり、時間が来たら出発。
毎朝そんな感じだ。

「はぁ…魔法も漫画みたいに便利ならなぁ」

自然と愚痴が漏れる。

現代、現実の魔法。
それは、魔法とは言えないくらい小さなもの。
暗示やおまじない、ちょっとした身体能力の向上くらいだ。
『空が飛べる―』とか、
『攻撃魔法だ―』とか、そんなもんは有り得ない。

『魔法』。
なんて大それた名前をつけたんだろう。

※※※※※※※

「みんな、今日も登校してきたのか。元気だな」

とても教師とは思えない担任、水野が入ってきて朝のホームルームが始まる。
いつもと同じ風景……ではなかった。
確かに水野先生が入ってくるところまではいつも通り。
でも、いつもと違っていたのは、その水野の後ろに昨日の生徒がついてきたことだ。
その『普段と違う』というだけで自然と教室が騒がしくなる。

「じゃあ、新しい仲間がやってきたんで仲良くしてやってくれ。は

い、自己紹介」

「はぁ！？」

クラス全員が声をあげる。
俺を除いて。

「言っとくが転校してきたんじゃないからな。ただのクラス替えだから」

「……」

水野先生の話が終わると、昨日の少女が教壇に上がり自己紹介を始めた。

「E組からきた神野沙耶（こうのさや）です…。よろしくお願いします」

神野沙耶って名前か。

「……ん？」

気付くと教室中の誰もがひそひそと話をしている。
ちらほら聞こえてくる内容は、あまり感じのよいものではなかった。

「神野って、あの神野？」

「やばくね？」

「つか、クラス替えってありえないでしょ…」

「……」

どういうことだ？

神野沙耶という生徒は何かしたのだろうか？
実際、生徒数が多いので生徒全員を知るのは難しい。
でも他のみんなは知っている。

「俺だけ？」

「もしかしてお前、知らねぇのか？」

ぶっきらぼうな声で話しかけてくる。

高槻賢（たかつきけん）。

金髪。
ピアス。
誰が見ても不良。
でも猫が大好き。
料理が大得意。そして自分からボランティアをするくらい優しいというスーパーギャップボーイ。

「知らない……。そんなに有名なのか？」

「お前はこういうの疎いからな。しかたねぇから教えてとくか」

賢は腕を組んで沙耶を見た。

「神野沙耶……。あいつに触ったやつは死ぬって言う噂があるんだ……」

ｅｐｉｓｏｄｅ１―ｌｉｇｈｔ―

「は？」

突拍子もない……

人に触っただけで死ぬわけないだろう…。

「ま、俺もそんなん信じないけどねぇ」

「……そうだよな」

ぶっきらぼうな賢の言葉が俺を安心させる。

だけど教室は嫌な雰囲気のままだ。

彼女は席を指定され、ゆっくりと席に向かっていく。

俺の斜め後ろの席みたいだ。

視線を向けるがあちらは気にしてない様子だった。

というか無視に近い。

本当に昨日の子と同一人物か？

※※※※※※※

ホームルームが終わり、みんなが一斉に話を始めた。
内容はもちろん沙耶。

沙耶はそんなことは気にせずに本を開いた。

「……？」

本の題名……世界の終わり方と終わらせ方。

「……誰があんなの書いたんだよ」

俺は席を立って沙耶の方に寄った。

元々仲がいい奴は少ないので周りの目は気にしない。

「……よ」

「……」

おいおい、少しは反応してくれよ。
これじゃただの恥ずかしい奴じゃねぇか。

「昨日はどうもな」

「……」

痛い……

痛すぎるっ！！！！

いくら周りの目を気にしないって言ったって……

これじゃ俺、変なやつじゃん！！

「あの……」

沙耶は俺にだけ聞こえる様に囁く。

「昨日、言いましたよね……。かかわらないほうがいいって……」

「……冗談じゃなかったの??」

「なんでそんな冗談言わなくちゃいけないんですか……」

「……」

そりゃあそうか…

「でも、理由がわかんないだけど」

「噂通りですよ……」

「えぇー……。そんなおとぎ話みたいなことあんのかよ…」

「あります」

即答。

「もういいですか?」

「えっ」

沙耶はいそいそと廊下に出ていった。

「あらら…」

本当に昨日とは別人だな…

※※※※※※※

授業も終わり、生徒たちもバラバラと帰り始める。

「さて、俺も帰るかな」

教科書とノートが一冊ずつだけ入った鞄を持つ。

今日の家での課題。

真面目というわけではないが、怒られない程度の勉強はしているつもりだ。

今日も家帰って、魔法の練習でもすっかなー……

そう思って階段を降りようとしたら沙耶を見つけた。

沙耶は屋上に向かって階段を上っている。

今、俺にラッキーなことがあったのは秘密。

「屋上か…」

風強いってのに……

ガチャ

風が入口に吹き込んでくる。

「！？」

強い光。

閃光とはこのことをいうのだろうか？

いや、そんなことより驚くべき所がある。

その光は沙耶の手の先から放たれていたのだ。

光は屋上からの景色をすべて埋め尽くしていた。

「鴻上くん！？」

沙耶は俺に気付くと光を放つのを止めた。
「今、何してたんだ？」
「な、何もっ」
「いや、明らかに光ってただろ」
「！！？」
「沙耶？」
沙耶は目を見開いて驚いている。
なんか驚くようなこと言ったかな……
「……えたんですか？」
「は？」
「光、見えたんですかっ！？」
「っ！？……ああ、見えたけど…」
びっくりした。

かなり動揺してるようだけど、どうしたんだろう？

「あの、鴻上くん……。帰りに少し付き合ってくれませんか……？」

「え？？」

「ダメでしょうか……？」

「い、いや全然オッケーさ！！！」

テンパった。

「？？？……了承してくれたってことでいいんですね？……じゃあ放課後に声かけるんで」

沙耶は先に戻っていった。

昨日のキャラに戻ったな…

それにしてもおかしい。

…あんなに強い光を放つ魔法なんてないはずだ。

まぁ何にせよ放課後に聞けばいいか……

ｅｐｉｓｏｄｅ２―ｗｉｓｈ―

うむ。
緊張する。
女の子に誘われるなんて今まであっただろうか。
未来は……
あ、あいつは昔からの腐れ縁ってことで例外にしておこう。
まぁ教室に戻ってきたはいいけども、声を掛けられるまでがドキドキしてたまらない。
おぼつかない手つきで鞄の道具を確認する。
「直樹くんっ」
「！？」
沙耶が声をかけてきた。
名前を呼んできたのにもびっくりしたけど、まさか教室でこんな大きな声で話しかけてくるとは。
実際に他のみんなは、
「神野が楽しそうなの初めてみた…」とか、
「あの２人ってどんな関係？」とか話している。
ま、何言われたって関係ないけどね。

「じゃあ行きますか♪」

沙耶が言う。

「お、おう」

※※※

「じゃあここらへんでいいかなぁ……」

「？」

俺が沙耶に連れられてきた場所は花畑。一面きれいな黄と緑が広がっている。

「ここ……」

「はい、私のお気に入りの場所です♪」

いや知らないけど。

でも沙耶はとても満足そうに話してくる。

「初めてです…。この場所に他の人連れて来れたの……」

「……」

「あの……、お願いがあります」

急に改まった態度になる。

おそらく、その頼み事が、俺を呼んだ理由なんだろう。

「お願い??」

「はい。……あの、これから先、私の近くにいてくれませんか……?」

「……はぁ!?」

今なんて言った?

これってあれか?

巷でよく言う告るってやつか!?

しかも俺!!?

ありえねぇぇぇぇ!!!!!

「あ、今のは告白じゃないですよ」
「……やっぱり？」
そりゃそんな甘い話あるわけない。
でも、あんな頬赤くして言われたら勘違いしちまうよ。

「で、詳しくはどういったご用件で？」

「率直に言うと、私の仕事を手伝って欲しいんです」

「仕事？」

おぉ…
一気にリアルな相談になってきたな。

「はい。さっき…私、屋上で魔法を使ってましたよね」

「あぁ、あの光ってたやつだろ？」

「……やっぱり見えたんですね……」

沙耶は嬉しいのか悲しいのか、複雑そうな顔を見せた。

「実は……」

※※※

それから２０分くらい話を聞かされたが、まとめると次のようになった。
まず、何をすればいいのかわからないけど、あの魔法の手伝いをする。
あれは、沙耶しかできないものらしく、手伝うことができる人間も決まっているらしい。
なので、できるだけそばにいるようにしたいとのことだった。

ｅｐｉｓｏｄｅ３－ｂｌｏｏｄ－

翌日、沙耶が魔法を使うそうなので屋上にやってきた。
結構頻繁にするらしい。

「で、実際はどうすればいいわけ？」

「魔法を使うとき、近くにいてくれるだけでいいですよ」

「それだけ？」

なんかあっけない。

「俺、意味あんのか？」

「はい。ありますよ」

「そーすかー」

うん、意味がわからない。

沙耶は手をかざしはじめる。

ほんとに俺は意味ないんじゃないか？

「今から１０メートル以上離れないでくださいね」

「１０メートル？」

「はい。それくらいが限界ですね」

「まあここらへんにいればいいんだよな？」

俺はその場に座り込む。

「じゃあ少し待っててくださいね」

――

沙耶は魔法を発動させた。

また眩しい光が散り出す。

「何回見てもすごいな…」

「今見れるのは私と直樹くんだけですよ」

「はは、独占だなこりゃ…」

※※※※※※※

「おつかれ」

「ありがとうございます」

俺は買ってきたジュースを投げて渡す。

「で、俺はあそこにいて意味あるの？」

「直球ですね…」

父親はちょっと奥手なんだけどな。

「まぁ簡単に言うなら私の魔法にブーストをかけているんですよ」

「ブースト？」

「はい。出力を上げている、って言ったほうが簡単でしょうか？」

「俺なんかで大丈夫なのか？魔法あんまり得意じゃないぞ」

「いえ、あなたの体質ですよ」

「体質？」

体質といわれてもあんまり実感はない。
どこを検査しても普通の人と同じだし、学力・身体能力は並。
平凡すぎる…

「直樹くんのお父さんとお母さんの名前教えてくれますか？」

「父さんが優樹で母さんが美緒」

「姓は？」

「父親のほうだけど…」

「母方は？」

「神野…だっけかな…」

「やっぱりですね…」

沙耶は回答を受けると何かを考え込むように口に手を当てる。

「…なんか関係あったりするのか？」

「はい。まずはですね…、かなり離れていますが私とあなたは少し血が繋がってますね」

「は！？」

「いや、かなり遠いんで親戚とも全然いえないですよ。心配しないでください」

「そうか…」

つか心配ってなんの心配だよ…

「おそらく母親の方が神野の遠い家系だったんだと思います」

「で、その血を引いている人間しか手伝えないと、そういうわけだな」

「そのとおりです」

俺の母さんがねぇ。

あの年中バカップル夫婦にそんな秘密があったとは…

「直樹くんのお父さんとお母さんも何か辛い経験があったかもしれませんね」

まぁだからこそのバカップルか。

episode4―morning―

近頃新しいウィルスが発見されたとか嫌なニュースが飛び交っている。

そんなニュースをリアルタイムで見ている俺。
どんなに科学が進歩しても所詮人間は人間なんだと実感をしていた矢先に、はぁ、もうちょっと頑張れば防げたかなぁ、なんて言いやがる少女が一人。

「お前、頑張ればこのウィルスなんとかできたのか…？」

「まぁ、無理ではないですね」

簡単に言ってくれる。

「あの魔法でか？」

「ですねー」

沙耶は軽くそう言うとおかずを口に運ぶ。

「で、今なにしてる」

「ご飯食べてます」

「そうじゃなくて！！なんで俺の部屋にきてんだよ！！」

「鍵開いてましたから」

答えになってない。

「あのなぁ、先に学校行って待ってればいいだろ」

「ご飯まだだったんですよ。あ、このエビフライひねくれてますねー」

曲がっているエビフライを箸でつかみ、眺める沙耶。

この方は、本当にコミュニティを拒絶していた人なんでしょうか。

何？このずうずうしさ。

「そういや沙耶の家は？」

「ごく普通の一般家庭ですよ。神野の血とかそういうのを除けば」

「家系以外は普通か…」

「それが一番やっかいなんですけどね」

親から子へと引き継がれる罪の連鎖。
沙耶は皮肉そうにそう言った。

「…」

俺は話を流したように見せながら味噌汁をすする。

「そういえば何でこんなに料理できるんですか？」

「いや、本とか見ながら作ったら覚えたけど…」

「…」

「何だその無言は！！似合わないってか！？」

「い、いやそんなことはっ」

沙耶は無理に誤魔化すがもう遅い。

「いいんだ、もう慣れてるから…」

調理実習のたび女子はそんな反応をする。
意外だねーとか、似合わないーとか。
知ったことかバカヤロー。

「ん？」

沙耶を見るとベランダを覗こうとしていた。

「ちょっ、待てっ！！」

「…猫、ですか？」

俺のベランダの隅に猫がちょこんと座っている。

「……管理人さんには黙っててくれ…」

ｅｐｉｓｏｄｅ５―ｄｉｓｈ―

「あ、直樹くん」

「ん？」

「お昼、いっしょにいかがですか？」

学校の廊下。

右手にパンを二袋ほど持って沙耶はやってきた。

「おー、ちょっと待っとれ。今弁当取ってくる」

「やっぱり自分で弁当作ってるんですね♪」

「そういや俺、記憶の消し方っての教えてもらったんだ…」

俺はそう言いながら右手を沙耶の頭上に持っていく。

「す、すみませんっすみませんっ！！謝りますからその拳をおろしてー」

※※※※※※※

「相変わらず美味しそうですね…」

「だろ。けっこう苦労してんだこれが」

男が料理を作る。
しかも、弁当にこれだけこだわってる学生は少ないんじゃないだろうか。

「そういや沙耶は弁当じゃないのか？」

「お母さんが看護の仕事なので…」

「そっか…。じゃあ、自分では作ったりは？」

「……」

なんだ、この無言は…

「この前オムライスを作ったんですよ…」

「お、おう」

そして急に喋りだす。

「最終的にオムレツになりました…」

「なんでっ!?米はっ!?米はどこにいった!?」

「どうせ…、どうせ私なんか料理できませんよっ!!卵だってきれいに割れないし、野菜を切れば大きさはバラバラですっ!!ガスコンロなんて一回使っただけで壊しちゃうんですからっ!!」

「……」

え、これシリアスな状況？
つかオムライスからオムレツになるのもすごいけど、ガスコンロってどうやって壊すんだ？
逆に知りたいよ。

「…ぐすっ」

「ま、まぁお前が料理できないことは十分わかったから…」

「っ！！」

「ご、ごめん、ごめんっ」

「り、りんごの皮くらいむけるんですからねっ！！」

ｅｐｉｓｏｄｅ６－ｐａｒａｌｌｅｌ－

いつも通りの通学だと思っていた。

「おいおい……」

学校につくとその異変はすぐにわかった。
校舎の一部がまるで爆撃を受けたように削り取られていた。

「一教室丸々吹き飛んでんじゃねぇか……」

生徒はもちろん、先生等も警察を待っている状況だった。
幸い、登校前に起こったらしいので、けが人はいないみたいだ。

「直樹くん。すぐに魔法を使います」

「……？もしかして深刻な状況？」

「ですね。今は人目があるので、丘に行きましょう」

「お、おお」

※※※

丘の頂上。

沙耶はすぐさまに魔法を行使する。

「あれって……」

「たぶん魔法です」

「あんな魔法使えるやついるのか？」

「んー、詳しく言うとこちらに召喚された事象、ですかね」

「……わかんないんだが」

「例えばですね、世界は分岐するとか、異世界とか、そんな話は聞いたことはありますか？」

「ああ、漫画とかゲームでよく使われるやつだろ？」

「私の魔法は、その世界の混在を抑制してるんですよ。まあ、異世界は言い過ぎましたけど」

「は？」

「実際に世界というものは数多く存在しています。もしこうだったら、こうしていたらっていう世界が。そしてその世界が混ざらないようにしているのが私です」

「一気にすごい話になったな……」

この世界以外にも数多くの分岐世界がある。
そして、その多世界を混ざらないようにしているのが沙耶ってことか。

「確かに、いきなり言われると信じれない話ですよね」

魔法を終え、沙耶が俺の横に座る。

「今日はちょっと長かったな」

「はい、頑張りました！！」
声は元気だ。
見るからに疲れてるけど。

「で、話の続きなんですが、この世界、おかしいとは思いませんか？」

「い、いや、おかしいって何が？」

「魔法……。今じゃ普通にみんな使ってますが、おかしいとは思いませんか？」

「おかしい……？普通じゃないのか？」

「そもそも魔法が使われ始めたのは２０年くらい前からです。なぜ魔法というものが存在し始めたのか」
確かに、魔法の歴史はかなり浅い。
俺の父さん、母さんが若い時に発見された物らしいけど。

「この、魔法という物もまた、世界が混在してこちら側に来てしま

った代物なんです」

「は！？ということは、もともとこの世界に魔法なんて存在しないのか！？」

「そうです。母の時代に魔法というものがこちらの世界に混ざったんです」

「なんか壮大なことに巻き込まれてるような気が……」

「はい。巻き込んでます」

即答ですか。
沙耶はにっこりとこっちを見てる。
今更断らないよねと、目で訴えられてるようだ。

「まぁ暇だし、いいけどさ……」

「ありがとうございますっ」

まったく、未だに何者かよくわからんよ。
新聞に出すなら、一人の少女が世界を救う！！みたいな感じだろ。
ほとんどの人は信じてくれないだろうけど。

「直樹くん……」

「ん？」

「肩借りますね」

「は？」

こてっ。

俺の肩に沙耶の頭が乗る。

「お、おい」

「今日、は……なんだか疲れまし……た」

寝ちまった。

なんか死亡フラグみたいな台詞だな、おい。

「あ！！学校！！」

沙耶の寝顔を見る。
ぐっすりっすね……

「……サボろ」

episode7―hope―

「直樹くん、今日はちょっと長くなるかもしれないですけどいいですか？」

「ああ、別に構わないけど」

いつも通り階段を上るが、いつも通りでないこともある。
まぁ、教室が一つ吹き飛んだ校舎もそうだけど、沙耶の様子がおかしい。
いつも通り振舞っているつもりだろうが、顔色は悪いし、足取りが不安定だった。

「じゃあ始めます」

光りだす沙耶の手。

ああ、やっぱ綺麗だな―――

でも……

「なぁ」

「はい？」

「体調悪いんじゃないか？」

「……やっぱり分かります？」

沙耶は苦笑いしながらこちらを向く。
その顔はやっぱり青白く、元気のないものだった。
「今日は休んだらどうだ？」
「駄目ですよー。もう悠長なことは言ってられなくなってきましたから」
まぁ、この校舎の一件もあるが……
「でも、沙耶が倒れたら意味ないだろう？」
「……。……そう、ですね。少し休みます、か……っ……ぁ」
魔法を止めた沙耶は急にガクン、と崩れ落ちた。
「沙耶っ！？」
※※※
「ぅ……」
「気がついたか？」
「……直樹くん？ここは……？」
沙耶は弱々しく上体を持ち上げた。
「ここは保健室だ」

沙耶が倒れた後、そのままにしておくわけにもいかないので保健室に担いできた。
……あれだな。
女子を担ぐときは、重さに耐えるより、理性を保つほうが何倍も辛い。

「すみません……。いつも手伝ってもらってるのに……」

「何を今更」

というか、飯までたかりに来てるだろ。

「もう、直樹くんの力を借りても無理かも知れません……」

「おいおい、いつもの元気はどうした？」

こんな弱気な沙耶は初めて見た。
表情を伺うも、疲れているだけではないのがよく分かった。

「もう……」

沙耶は、下を向いて掛け布団を握りしめている。
その掛け布団を小さな雫が何回も何回も濡らしていた。

「……。……俺に何かできることないか？」

「！？」

もう、ただ見てるのはきつい。
できることは本当に小さいことかも知れないけど。

「直樹くん……」

「その魔法はできないけど、それ以外ならできるかも知れないだろ？」

「じゃあ、関係ないお願いですけど……」

沙耶は涙を拭って、真っ直ぐと俺を見る。

「ずっと、私のそばにいてくれますか？」

「……」

「私を……好きになってくれますか？」

「ああ、そういうことか」

「えっ？」

「簡単すぎるんだよ、お前のお願いは」

episode8―feel―

沙耶が倒れた日の翌日。

沙耶は俺の家に朝飯を食べに来ていた。

「なぁ、ほんとに俺のこと好きか？」

「はい。むぐ……、大好き……です……あむ」

「なんで食いながら！？」

目線すらあってない。

「で、体調は大丈夫か？」

「あ、はい。大分回復しました。まぁ風邪ってわけでもなかったですし」

「そうか……」

確かに、この食欲を見ればね。

「そういや、前から思ってたんだけどさ……」

「はい？」

「なんでお前敬語なんだ？」

「敬語、ですか？……それといって理由はないですけど、今までは
あまり他の人と話す機会がなかったからだと思います。友達ってい
う人もいませんでしたし」

沙耶はあまり悲しそうにも見えない顔で話す。
誰とも話さない。
それが沙耶にとっては普通だったのだろう。

「……じゃあ、今日から敬語禁止！」

「え……？ぇえええっ！？な、何でですか！？」

朝飯に夢中だった沙耶が急にこちらを見る。
逆に俺がびっくりしたりする。

「い、いやー、実は俺、同年代に敬語で話されるの抵抗があったん
だよねー」

「今更、驚愕の事実を知らされましたよ！」

「ほら！もう敬語はだめだ！」

「う……。……うん、わかったよ、直樹くん」

「……」

こ、これは……

敬語をやめる。
それだけのことなのに、予想以上に強力だった。

「直樹くん？」

「な、なんだ？」

「今日も屋上で魔法使うけど、いいかな？」

「あ、ああ。無理しなきゃいいぞ」

「ありがとう、直樹くん！」

「……。敬語に戻そうか……」

episode9―stance―

「また……か」

校舎爆破事件から4日後の朝、再び事件が起きた。

学校近くの家が一軒、丸々消失。

柱も残骸も跡形もなく。

沙耶が調べた結果、これも世界の歪みと混在が原因だった。

※※※

学校の屋上に来ていた。

いつもより強い風が俺と沙耶を吹き付けている。

「元気、だせよ」

「……私は大丈夫ですよ？」

「ほんとか？」

「もう、1人じゃありませんしね」

沙耶は目元が赤い笑顔を見せた。

まったく、ほんとに強いやつだよ、こいつは。

「で、どうすんだ？というかいつもの作業を繰り返すしかないんだろうけど」

「でも、回数を増やしても意味ないところがきついんですよね……」

「まじか……」

現状維持が限界ってことか。

今でこれくらいってことは沙耶が魔法を止めたら……。

考えるだけで恐ろしい。

「で、相談なんですが」

「うおぅ！？」

いきなり顔を近づけてきたので飛び跳ねるくらい驚いた。

「知り合いの人に話を聞きに行きたいんですけどついてきてくれますか？」

知り合いに神野とこの世界について詳しい人がいるので、その人に話を聞きに行きたいということらしい。

場所はかなり遠いらしいが。

「1泊くらいの覚悟でお願いしますね？」

「まあ構わないけど……」

「じゃあ明日出発で！」

「いきなり！？学校は！？」

「直樹くん、細かいことは気にしちゃいけませんよ？」

こいつ、俺より適当なんじゃないだろうか。

ｅｐｉｓｏｄｅ１０－ｒｏａｄ－

翌朝、俺たちは話しを聞くために遠出することになった。
もちろん学校は休みました……
で、現在は電車の中。

「直樹くん」

「んー？」

少し眠りかけていた時、沙耶に話しかけられる。

「新婚旅行ですねっ」

「違うわっ！」

目が覚めた。

「え！？違うんですか？」

色々とおかしい。
というか目的が変わってる。

「じゃあ……婚前旅行ですねっ？」

だから目的が変わってる。

「学校まで休んだんだから……」

「学校なんてどうでもいいじゃないですか」

ええええ……

こいつの価値観がわからん。

「しかも、2人きりで宿に外泊ですよ？危険な香りが……」

「危険なのはお前の頭だ！」

まったくもう！

キャラが安定しない奴だなほんとに！

「で、これから会いに行く人ってどんな人なんだ？」

「催眠術師です」

「……」

「母に聞いたところ、人に暗示をかけることが得意だそうです」

それだけ聞くと危な過ぎるんだが……

「いい人みたいですよ？」

「何を根拠に！？」

ゲームとか漫画に例えると明らかに敵キャラじゃねーか！

「昔、お母さんに聞いただけで実際には会ったことないんですよ」

「だ、大丈夫なのか？」

「住んでる場所は分かります」

ふ、不安だ。

というか何？そのガッツポーズ……

「ま、それより……」

沙耶は体をこっちに向けて言った。

「その人の所に行くまでは楽しみましょうよ。ね？」

「……だな」

episode11―limit―

しばらく電車に揺られているうちに目的地に着いた。
駅から出ると大きな川が南北へと伸びていた。

「綺麗な場所ですね？」

「だな……」

川の周りに並んでいる木々は、ほど良く赤と黄に染まっていた。

「で、宿はどこなんだ？」

「宿はここからすぐですよ」

沙耶は川をはさんだ向こう岸を指差す。
そこには大きな文字で『おいでやす』と書いてある建物があった。

『おいでやす』って……

「じゃあいきましょうか」

※※※

「あ、いらっしゃーい。宿泊ですか？」

旅館に入ると女将らしき人が迎えてくれた。
奥の方には何人かの宿泊客がお土産を買っている。

沙耶は女将さんの所に行って宿泊の手続きを始めた。

「一泊でお願いします」

「かしこまりました。部屋は一つでよろしいですね？」

「はい。できるだけ狭い部屋でお願いします」

沙耶！？なんで！？

「うふふ、とっておきの部屋をご用意しますよ、お客様……」

お、女将さん！？

初対面だよね、あなたたち！？

※※※

指定された部屋に入ると、畳特有のいい匂いがしている。

窓からは駅の近くに流れていた川も見えた。

「いい部屋ですね」

俺は部屋に着いた途端、急に疲れがきてすぐに座り込んでいた。

「……？直樹くん、顔色が良くないですよ？」

「い、いや、大丈夫。旅行が楽しみで眠れなかっただけだから」

「そうですか？具合が悪い時は言ってくださいね？」

「おぅ。あ、俺ちょっとトイレに行ってくる」
俺は立ち上がって部屋から出た。
「……っ」
足を速める。
最初は歩いていた足がすでに全力疾走まで歩を速めていた。
トイレの洗面台に来てすぐに自分の状況が分かった。
「吐血……」
口から血が流れていた。
「っ！……かはっ！」
吐血が洗面台に飛び散り、『ビチャッ』っと嫌な音が耳に入る。
限界だった。
沙耶じゃなく『俺』が。
最初の頃はなんともなかったが、少しずつ俺の体に影響が出てきていた。
沙耶が魔法を使う時、体中に裂けるような痛みが走る。
回を重ねる毎に痛みが増して、遂にここまできてしまった。
「まさか吐血までするとはな……」
口元を拭う。

「まだ……、まだ大丈夫だ……」

そう自分に言い聞かせて部屋へと戻った。

episode12―blue―

「ん……」

朝日が差していることに気付いて目が覚める。

「あ、お目覚めですか？」

沙耶はすでに起きていて、布団を畳んでいた。

「ちゃんと眠れましたか？」

「んー、微妙だったな」

やっぱり寝床が変わると寝づらいな。

それに、昨夜の吐血の件もあるし。

「ご馳走様でした」

「……は？何が？」

急に何だ？

「……」

沙耶はゆっくりと自分の指を持ち上げる。

そして、指が止まった場所は唇。

「……おい、まさか寝てる間に」

「だって初めての旅行だったんですよっ！？」

キレた！

「もう、ほら、こういう場合って普通は襲って来るもんじゃないんですか！？」

「知るかっ！！」

つーか具合悪くてそれどころじゃなかったし！

「私、３時くらいまで起きてたんですよ！？」

一途過ぎる！

※※※

朝飯を食べ、捜索を開始する。

一度駅まで戻り、そこから地図を頼りに探すことにした。

「そこを右ですね」

俺は沙耶の指示に従いながらついて行く。

こうして景色を見ていると、俺たちの町より田舎の様な気がする。

川も整備されていないし、道路も所々に畦道が見当たった。

その、初めて見るであろう光景に違和感を覚える。

自分でもよく分からない感覚。

何故だろうか……

――とても懐かしい気がする

この風景……、昔に見た様な……

「あ、あれじゃないですか？」

駅から３０分程歩いた頃だった。

少し疲れが見え始めていた沙耶が前方に向かって指を差した。

「確かに……。滅茶苦茶怪しすぎるな」

目の前に小さめの家。

門には看板が置いてあり、『催眠やってます』と書いてあった。

胡散臭過ぎる。

「大丈夫かよ？」

「大丈夫ですよ」

少しは疑うってことも知ってくれ。

「じゃあ入りましょうか」

沙耶が玄関のチャイムを鳴らす。

すると奥の方から『ドタドタ』と走る音が近づいてきた。

〈バンッ〉

「いらっしゃい！」

「え！？」

驚いた。

いや、急に出てきたから驚いたというわけではない。

ドアの向こうから現れたのが、明らかに同年代程の容姿をしていた女の子だったからだ。

ｅｐｉｓｏｄｅ１３―ｔｒｕｅ―

「はじめまして！催眠術師、『アリア』と申します」

玄関。
改まって挨拶をされる。
というか想像より若すぎる。
若過ぎる、いや同い年くらいじゃないか？

「今日はどの様なご用件で？」

「あの……」

「あ、立ち話もなんだから中に入って」

「……」

この人、すごいマイペースだ。

そのまま俺達は奥の部屋まで招かれる。
着いた部屋はテーブルとイスが置いてあるだけの寂しい部屋だった。

「紅茶でいいかな？」

目の前に紅茶を置かれる。
赤っぽい綺麗な色が目に入る。

「で、２人は新婚さん？」

「違っ……」
「もう少しで結婚します」
沙耶！？
満面の笑みで言わないでくれ！
質問も意味わかんないし！
「そう……。いいね、若いって」
「いや、あんたも充分若いと思うんだけど」
「私っ！？」
アリアは心から驚いたような顔をした。
「私、そんなに若くないよ？かれこれ３０００年くらい生きてるし」
『は？』
俺と沙耶でハモった。
「まてまてまて。ありえないだろ、そんな容姿をして」
「ま、そこは置いといて」
置いとくのか！？
まあ、普通はありえないだろうけど、やっぱり冗談か？
「今日は何があってきたの？」

俺が今、『ほんとにマイペースだな！』って思ったことも置いておく。

「ただの旅行ってわけじゃないんでしょう？」

「……はい」

沙耶は姿勢を正し、話し始める。

「私、神野沙耶って言います」

「！？」

「それで実は……」

沙耶は今までの経緯を話した。

一瞬は驚いたアリアだったが、その後は特に変わった様子も無く聞き続けた。

「そう……。神野、ね」

「何か分かることはないでしょうか？」

「……」

アリアは何かを考えている様な素振りも見せず、紅茶に砂糖を入れスプーンでかき混ぜる。

「まぁ、全部分かるよ。たぶん神野の家系よりも」

「えっ！？」

アリアは紅茶の入ったカップを口に運び、ゆっくりとテーブルの上に戻した。

「平行世界、つまりパラレルワールドの混在を防ぐ。それが神野の役割。ここまでは知ってるね」

「はい」

「じゃあ、何故、世界が混ざり合おうとするのか。何故、神野なのか」

確かに、そう言われるとかなり違和感がある。
今までも、何故こんな女の子が世界を維持するために行動しているのか疑問だった。

「私はね、実は他の平行世界のことも知ってるの」

「え……」

「で、元々の原因は他の平行世界に起きた事件」

アリアはテーブルの上に置いてあった鞄の中から資料らしき物を取り出す。
何枚か捲ると、俺と沙耶に見せてきた。

『世界干渉魔法』

「文字通り、世界に干渉することを目的とした魔法だよ」

「世界に干渉する？」

「うん。時間を止める、無いものを生み出す、質量保存を無視する……、あ、沙耶ちゃんの魔法も世界に干渉する魔法だね」

つまり、基本的な世界の法則を破ると世界に影響が出る、ということだ。

「そして……、ある世界で『世界そのものを操作する魔法』が使われた。もちろん不完全で実験段階だったその魔法は、ただ全ての世界を崩壊させた。世界の混在が始まったのはそこからなの」

episode13―true―（後書き）

なんか、一気に内容を詰め込み過ぎちゃいました……
説明を文にするのが難しい……

episode14―select―

＜とある平行世界＞

多くの人々にとって、それは突然だった。
放たれた魔法。
もはや魔術とは言えない、強力な魔法だった。
それは時間を逆流させ、空間を切り裂き、一瞬で多くの生命を奪う程のものだった。

さらに、災厄はその世界だけに留まらなかった。
時空と空間が歪み、多くの世界へと影響を及ぼしていく。

これが現代にまで引き継がれる『呪い』だ。

※※※

「……」

俺と沙耶は聞き入っていた。
信憑性はともかくとして、ことの重大さが再認識できた。

「ついてこれてる？」

「は、はい」

かなり突拍子もない話だけども。

「……で、でも、なんで沙耶？」

それでも、俺には沙耶が辛い思いをする理由が分からない。

「……それは世界の混在を防ぐ能力を受け継いでいるからだよ。その家系全員がね」

「……」

「世界の混在を防ぐため、『世界』そのものが実行した『プログラム』」

――世界は『そのままの状態を維持する』傾向にある。

――そのために、世界の混在を拒否した。

――世界の混在を防ぐ能力を1人の人間に与え、受け継がせていく。

――その『血』によって。

「そんな……。それじゃあ」

「先祖様の運が悪かったとしか言えないの……。世界は全人類の中から『神野』を選定した」

アリアは何故か自分のしたことのように申し訳なさそうな顔をした。

「でも……」

沙耶がゆっくりと重い口を開く。

その声は当たり前のように震えていた。
「私の魔法じゃもう無理です……。もう……防げない」
既に沙耶の力では抑えきれなくなっている。
頑張っても現状維持。
定期的に災厄は訪れてしまう。
「そう……。ここに来た本当の理由はそこね？」
「……はい」
「まあ、魔法が弱くなってる原因は簡単だよ？」
「えっ？」
「その先祖様の代から現代まで、ずーっと純血ってのは難しいでしょ？だから、ただ単に先祖様の血が薄まっただけなの」
「……」
確かに。
家族間なんて考えられん……
「で、対応策なんだけど……、少しだけ時間をくれないかな？」
「え？」
「ちょっと調べてみたいの」

「じゃあっ……」

「うん。この『アリア』があなたたちの力になってあげる」
アリアは胸を張って言った。

「あ、ありがとうございます！」

「でも、その間に魔法は使っちゃ駄目だよ？」

！？

「ど、どうして！？」

「そこの問題は、直樹くん、あなただよ」

アリアは俺に指を指しながら言った。

「は？お、俺？」

「明らかに、魔法ブーストの影響が出てる。かなり無理をしてるね」

「え……、な、直樹くん？」

沙耶の視線がアリアから俺へと変わった。

「そ、そんなわけないだろ。体調はかなりいいし」

誤魔化そうとした。
でも、アリアには通じなかった。

「それは嘘。そんな体じゃ、沙耶ちゃんが何回か魔法を使っただけで死んじゃうよ？」

「な、直樹くん……、体調が？わ、私が……」

沙耶はショックを受けた顔をしていた。
顔が一瞬で真っ青になるくらいだから相当なものだろう。

「私ができるだけ早く対処法を見つけるから、その間は体を休めといて」

「わかりました……」

俺はやるせない気持ちで答えた。

episode14―select―（後書き）

今回も詰め込み過ぎちゃってごちゃごちゃしてましたね……

episode15―tears―

「じゃあ、調べ終わったら連絡するからね」

「はい……」

アリアと別れて帰路につく。
一日で大量の話を聞かされたせいか頭の整理がつかない。
でも……
それよりもまずこっちの問題があった。
話の後からずっと元気がない沙耶。
俺の体調のことで負い目を負ったことは明らかだった。
まったく、あの人（アリア）……。俺だけに言ってくれてればいいものを……。

「沙耶？」

「……はい」

「俺は大丈夫だから元気出せよ」

「……でも、私のせいで直樹くんが死にそうになってたんですよ？
ちゃんとした知識も無しに協力を頼んで……、そして案の定、危険な目に遭わせていた……」

沙耶は自分の手をギュッと握り締める。
既に眼からは涙が溢れそうになっていた。

……やっぱり沙耶は優しすぎる。
もともと自分を犠牲にして世界を救ってる奴だし。
「わ、私は、なんてことを……」
見てられない。
だから俺は言ってやる。
「そんなの知ったことじゃねーよ」
「！？」
「俺は自分の意思で協力したんだ。後悔なんてしちゃいない」
「で、でもっ」
「それに約束しただろう？『一緒にいてやる』って」
「……」
「それとも何か？約束ふっかけてきたお前から破るってのか？」
沈黙。
沙耶の頬には既に涙が流れていた。
「泣くな」
そっと近づいて涙を拭ってやる。
そして沙耶の体を引き寄せた。

「私は怖いんです、失うのが……。世界も、日常も、自分も、直樹くんも、全部……」

「怖がったっていいさ。『人間』なんだから」

ｅｐｉｓｏｄｅ１６－ｙｏｕ－

久しぶり……とまではいかないが、数日ぶりの登校だった。
先生に休んだ理由やら、その他諸々問い詰められたが何とか誤魔化した。

※※※

朝の喧騒。
その中を掻い潜りながら自分の席に着く。

「おい」

「ん？」

賢に話しかけられた。
というか俺に話しかけてくる奴はだいたい限られてくるが。

「お前、なんで休んだんだ？」

「プチ旅行」

「マジ！？」

嘘ではない。

「沙耶ちゃんと？」

「へっ！？な、なんで沙耶が出てくるんだよ！？」

つーか『沙耶ちゃん』って……。どこぞの催眠術師かよ。

「だって2人とも同じ日に休んでるし……。しかも沙耶ちゃんも旅行って言ってたぞ？」

「えっ？あいつに教えてもらえたのか？」

「しつこく聞いてたら教えてくれた」

こいつ空気読めない男だな。

つーか逆にすげぇ。

「ま、深くは追及はしないけど、後で上手くいってるかくらい教えてくれよ？」

「……分かったよ」

と、賢と話を終えたところで沙耶の方を見る。

やっぱり他の人から浮いている。

沙耶の一つ一つの動作に拒絶の意思が感じられる。

「やっぱり巻き込みたくないからなんだろうな……」

※※※

チャイムが鳴り、昼飯の時間となった。

ほとんどの生徒は購買に向かうため、すぐに散っていった。

「直樹くん」

「ん？おぉ」

沙耶に話しかけられ、一緒に屋上へと向かう。
手にはもちろん弁当だ。
屋上に着くと、人が1人もいない空間が広がっていた。
俺達は街が見えるフェンスの近くで弁当を広げた。

「少しは元気出たか？」

「はい。昨日はキスもしましたからね……」

「ぶっ！？」

吹き出した！
いきなりか！？
いきなりそんなこと切り出してくるのか！？

「ふぁ、ふぁふぁふぁーすときすですよね！？」

「なんかすごく読みにくそうな言い方だな！」

しかも照れるなら言うなよ！

「確かに元気は出ました。でも」

「でも？」

「でも、やっぱりまだ自分が許せてないです……」
「お前のせいじゃないって何回言えばいいんだよ？」
「じゃあ直樹くん、あなたのせいです！」
「俺か！」
ビシッと沙耶は俺に指を指した。
でも、すぐにその指が力なく下がっていった。
「言ってくれればよかったのに……」
「悪い……」
そう言われると謝ることしかできない。
実際に沙耶を傷つけたのは体調のことを黙ってた俺だし。
「直樹くん……」
沙耶は弁当の箸を置き、俺の肩に身を寄せてきた。
そして力なく呟く。
「いなくならないで下さいね……」
「いなくならねーよ」
俺はできるだけ力強く答える。
そうしないと沙耶には伝わらないから。
沙耶は微笑むと俺の顔を覗き込んできた。

「ど、どうした！？」

「午後はサボりましょうか」

まさか。

沙耶がサボりを提案してくるとは。

でも、俺としてとては嬉しいサプライズだ。

「願ってもない。一緒に学校サボるなんて青春じゃないか」

「そう言ってくれると信じてました」

沙耶はより一層顔を近づけてきた。

「では……。直樹くんは『卵焼き味』と、『唐揚げ味』どっちがいいですか？」

ｅｐｉｓｏｄｅ１７―ｂａｃｋ―

「今のところは大丈夫。……ああ」

アリアからの電話。
もう少しかかる、との連絡だった。

「ん、分かった。ああ、よろしく……」

携帯の電源ボタンを押し、ポケットに戻す。

「どうでした？」

「あと少しかかるみたいだ」

「そうですか……」

沙耶と２人で商店街を歩いていた所にきた電話だった。
１人になると余計なことばかり頭に浮かぶので、できるだけ一緒にいるようにしている。

「やっぱりいつ何が起きるか不安ですね……」

「今はアリアに任せるしかないさ」

ただ待つだけなのがとても歯がゆい。
何も起こらないことを祈るだけ。

「今日はどうしましょうか……。直樹くんは、どこか行きたい場所ありますか？」

「行きたい場所か……」

辺りを見渡しながら候補を絞っていく。

「……あ、病院に行ってもいいか」

「病院？どこか具合でも悪いんですか？」

「お見舞いだよ、お見舞い」

「？」

しばらく会っていなかった奴。

月に一回は顔を出せ、との命令だったがここのところ忘れていた。

※※※

着いた病院は、商店街のはずれにある大きな病院。

この町の人ほとんどが、この病院のお世話になっているくらいだ。

玄関から院内に入る。

そこでは、今日退院したと思われる女の子が花束を持ち、母親と一緒に歩いていた。

「あいつはいつになるんだろうな……」

「直樹くん？」

「いや、なんでもない……」

５０２号室。
ここだ。

「入るぞー」

病室のドアを開け、窓からの光が俺の眼を眩ませる。
視界が戻っていくにつれて、数ヶ月ぶりの姿が映った。

「……直樹？直樹だ！」

「久しぶりだな……」

そこには、薄着のパジャマを着た幼馴染がいた。

ｅｐｉｓｏｄｅ１７―ｂａｃｋ―（後書き）

新キャラです。
ずっと前に名前だけを出していたあの子です。
やっと出演します。

episode18―side―（前書き）

やっと登場しました。
主人公と古い付き合いの人物。

ｅｐｉｓｏｄｅ１８－ｓｉｄｅ－

茶が少し混じった、肩甲骨あたりまでの黒髪ストレートが特徴的。
いろんなものに興味を示す、お節介ガール。
それが目の前にいる幼なじみ、木崎未来（きさきみらい）だ。
お節介とは言っても入院中の身なので、かなり限られるが。

「もうっ、月一くらいは顔出しなさいって言ってたでしょ」

「悪い。ちょっと色々あってな」

「ふーん……。というかさ……」

「？」

未来が俺の後ろにいる人物を見る。

「どちら様？」

「あっ、えっと……」

沙耶はオドオドしながらも自己紹介を始めた。

「こ、神野沙耶ですっ。直樹くんとはクラスメイトでして……」

「はじめまして、木崎未来です。私は直樹の幼なじみってとこかな？」

未来もベッドの上ではあるが体を起こして挨拶をした。

「でだ。まず未来に報告がある」

「え、何？」

横にいた沙耶を俺の前に引っ張り、未来と向き合わせる。

「こいつ、俺の彼女だ」

「……ふぇっ？」

未来は俺と沙耶を交互に見て、そして……

「ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

叫んだ。

「な、直樹くんっ！？」

沙耶も何がなんだか分からずに赤面している。

「なっ、直樹に彼女！？こ、こんな馬鹿で、阿呆で、無愛想で、ぶっきらぼうで、人でなしな直樹にっ！？」

「いくら何でも言い過ぎじゃないか！？」

こいつ酷い！

「ほ、本当に彼女？」

「本当だ」

「そ、そんな……。直樹にこんな可愛い彼女ができるなんて……」

「可愛いだろ？」

「な、直樹くんっ！？さっきから何言ってるんですか！？」

沙耶がツっこんだ！？

少し惚気過ぎたか。

「まさか直樹にねぇ……。あたしも学校に通えたら普通に恋愛できたかなぁ」

「お前だったらどこだって恋愛できるだろ」

ルックスいいし。

進んで厄介事に関わるし。

「沙耶さんだっけ？」

「は、はい」

「直樹をよろしくね……。直樹、大事なこと自分で背負いこむタイプだからさ」

「確かにそうですね」

即答！？

確かに最近無茶してたけど！

「もしかして未来さん……」

「あ、別に直樹に気があるわけじゃないから大丈夫よ。ただ昔からほっとけなくてね、私ってお節介だしさ」

「そ、そうですか」

苦笑いをする未来を見た沙耶は、戸惑ったように視線を下に向けた。あんまり人と接したことがなかった沙耶にとって、未来のような奴は初めてだったのかも知れない。
下を向いてる沙耶の顔を見ると、今まで見たことがないくらい照れているのが分かった。

「……直樹、変わったね」

「そうか？」

適当に答えると、未来は『そうだよ』と静かに答えた。

「何かに夢中になってる顔だよ」

「まぁ……、それなりにな」

夢中っていうか、何とかしなきゃやばいっていうか。

「私のことは気にしなくていいんだからね？」

「……それは無理だ」

「強情だなーもう……。その結果が今の友達の少なさだよねー」

「う……」

そう言われると言い返せない自分がいる。
でも、無理なものは無理なのだ。

「でもさ、今頑張ってる事はあるんでしょ？」

「まーな」

「……頑張りなよ？」

未来はまるで全てを見透かしたかの様に言うと俺達を見て微笑んだ。

ｅｐｉｓｏｄｅ１９－ｐａｓｔ－

木崎未来。
幼稚園からの付き合いで幼馴染。

事件は３年前に起きた。
２日前から風邪で学校を休んでいた俺は、家でずっとつまらないテレビを眺めていた。
そろそろ外の空気でも吸いたいと思った俺はぶらっと家を出ることにした。
熱もないし、咳もほとんどなかったので大丈夫だと思っていた。

でも、それがいけなかった。

商店街に向かい横断歩道を渡っていた時、一台のトラックが俺目掛けて走ってきていた。
風邪気味でボーっとしていた俺にとって、それは一瞬のことだった。

ただ俺は、誰かに突き飛ばされ、道路脇に転がった。

肘や膝を強く打って蹲りながら道路を見ると血まみれの未来が倒れていた。
赤い液体は瞬く間に広がっていき、多くの通行客の悲鳴を生む。

そこでやっと俺は気がついた。
俺の代わりに未来がトラックにひかれたと。

幸い、命に別状はなかったものの下半身不随。
背骨の途中から神経が途切れて歩くことができなくなった。

それから、未来は学校を休んでリハビリに励んでいる。

※※※

ドアが開き、病院を後にする。

「そう……だったんですか……」

「責任を感じないわけないじゃないか。あんな足になっちまってさ……」

だから、定期的に顔を出すようにしている。

約束上は月1回。

「で、なんでそれが友達の少ない理由になるんですか？」

「それがさ……、何も知らないクラスの奴が未来の悪口言っててな。『あれだけ顔広いんだから男でも見つけて遊んでるんじゃない？』とか……」

「それでキレちゃったと」

「その通りでございます……」

明らかに冗談だったのに俺が過剰反応しちまったということだ。

案の定、クラスから浮きはじめた。

例外の賢だが、あいつは事故現場に居合わせてたみたいだ。

というか元々から浮いてる奴だし。

「まったく……、クラスメイトは大切にしなきゃ駄目ですよ？」

「おい！その台詞、そっくりそのまま返すぞ！？」

お前こそ浮きまくりじゃねーか！

……と思ったら沙耶は笑って答える。

「私は大切にしてます。ちょっと形は違くて、みんなには理解してもらえないかも知れないけど……」

そうだった。

こいつはただ自分が特異な存在だったから……

「……お前、すごい奴だよな」

「そうですか？」

「ああ」

仲良くもない奴のために体はって頑張ってるんだ。

すごいに決まってる。

「……あ、そうだ」

「はい？」

「全部解決したら旅行に行こう」

「旅行……」

思いつきだった。
全てが解決したあとのご褒美として、それくらいいいじゃないか、と。
ただ、身近な目標として。

episode20―ready―（前書き）

※今回は節目になので短くなってます。
※途中からアリア側になってます。

episode20―ready―

「まだですかねー……」

アリアからの連絡を待ち始めて１０日が過ぎていた。

「どうなんだろうな……」

俺と沙耶はまた商店街をぶらりと歩いていた。
変わり映えのしない風景を見つつも、不安が隠せなかった。

「そこでコーヒーでも飲むか」

俺は右側の建物に視線を向ける。
最近よく寄るようになった喫茶店だ。

※※※

―アリア―

「世界の崩壊か……」

アリアは口元に手を運び、思考を張り巡らせる。

「そもそもこの世界だけ影響が大きすぎる……。ほとんどの世界は交じり合うことがなく、それぞれ個々の世界を存在させているのに」

『この世界』が異常。

他の世界と比較しても、これだけ大きな被害を受けているのは『この世界』と『もう一つの世界だけ』。

「やっぱり……これしかないか」

アリアは書類を一気に束ね、鞄の中に放り込む。

「さて、あとはあの2人次第ね」

アリアは上着を着て、大き目の鞄を手に家を出た。

ｅｐｉｓｏｄｅ２１－ｓｋｉｌｌ－

「っ！？」

沙耶と喫茶店でくつろいでいる時だった。
携帯の着信音が耳に入る。

「アリアだ……」

ポケットから携帯を取り、着信ディスプレイに目をやると『アリア』と出ていた。

「はい」

「あ、直樹くん？アリアです」

電話口からの声に軽く安心感を得る。

「ごめんね、遅くなっちゃって。でも、けっこう調べることができたよ」

アリアの口調はとても明るいものだった。
達成感のような、満足感のような。

「で。もう少しでそっちに着くから駅で待っていてくれない？直接話したいの」

「じゃあ、駅で待ってる」

俺は最後に軽く挨拶をして、携帯電話の電源ボタンを押した。

※※※

沙耶と駅で待つ事15分。

アナウンスが聞こえ、アリアを乗せた列車がやって来た。

「おまたせっ」

アリアは大きな鞄と共にやってきた。

いや、鞄というよりはジェラルミンケースだろうか。

「持とうか？」

「あ、じゃあお願いしようかな。悪いねー」

そのまま駅のベンチに3人で座る。

「で、何か分かったんですか？」

沙耶はすぐに核心をつく質問をした。

アリアは少し驚いたような顔を見せるが、すぐに笑顔を作ってジェラルミンケースに手を伸ばした。

「まったく……せっかちだねー」

そして、アリアは一枚の紙を取り出した。

「……これは？」

紙を見ると、星が降る絵が描いてあった。

地上に向かっている星は地球そのものだった。

「予知」

「予知？」

「というより確実に当たる予測かな」

「じゃ、じゃあ……」

再び紙に目を戻す。

「そう。世界が混ざり合う中でも最悪な事態が起こる」
「最悪の事態って何なんですか？」
「世界そのものがぶつかり合うの。この世界の場合、地球と地球が」
「な！？」
アリアは紙をゆっくりと折り、横に置いてあるケースにしまった。
「だから、それを防ぐために君達がいるんだよ」
「……でも俺達は」
ブーストをかけて現状維持が限界。
定期的に災害が起きてしまう。
しかも、それ以前に俺がくたばっちまうと思う。
「そこで私の出番！」
アリアは胸を張って立ち上がる。
「直樹くんを魔法が使える人間にしてあげる」
「お、俺！？」
「直樹くんにだって神野の血は少し流れてるし、ブーストまで出来てたから大丈夫だよ」
「そうなのか？」

沙耶と同じかそれに近い能力があれば確かに沙耶の力になれる。

「だ、大丈夫なんですか？ブーストだけでボロボロだったのに」

沙耶はこの前のこともあってかアリアにそんな質問をした。

「大丈夫だよ。完璧に能力を付加させてみせる」

自信を持って答えるアリアを見て俺達は安心できた。

今まで実質２人だけで行動してきたからかも知れないが、俺と沙耶にとってはそれだけで嬉しかった。

episode22―risk―

「で、何で俺の家に来るんだ……」

話の後、アリアは俺の家に来た。

「え、だってお金払って泊まるのも勿体無いし。あと、近くにいた方が便利じゃない？」

正論っちゃあ正論だけども……

アリアは荷物をリビングの隅に置き、ソファーに勢い良く座った。そんな彼女を見ると、どう考えても普通の女の子にしか映らない。テレビのリモコンを持つ仕草も、表情も。

「そういえば、沙耶はもう帰しちゃってよかったのか？」

沙耶は、アリアに『もう今日は何もないよ』と言われ家に帰って行った。

「いいのいいの」

「はぁ、そうすか」

俺は、キッチンに向かい、晩御飯の準備をすることにした。冷蔵庫の中身を見ると、野菜が多く残っていたので野菜炒めを作ることにする。

「もう少しかかるから適当にくつろいでてくれ」

「はーい」

※※※

「ごちそうさまー」

「はいよー。あ、そこの皿をとってくれ」

晩飯は結構好評だった。
特にご飯自体をあんまり食べたことがなく、４杯食べるくらい気に入ったみたいだ。

「さて」

アリアは体勢を直し、皿洗いをしている俺を見据えた。

「能力の話をしましょうか」

「お、やっときたか」

俺は皿洗いを中止しテーブルに着く。

「でもさ、それなら沙耶がいた時に話した方がよかったんじゃないか？」

俺がそう聞くと、アリアが首を横に振った。

「？」

「この話しをする場合、沙耶ちゃんは邪魔なだけだよ」

アリアはあくまで冷静に言った。

「どういう……」

「能力付加。何の代償もなしにできるとでも思ってた？」

「！？」

ゆっくりとアリアは手をテーブルの上に移動させる。

「実は、沙耶ちゃんが行っていた魔法はかなり高位なものなの」

干渉系第一級。

他世界では使用できる人間はほぼ皆無。

種類は多く存在するが、もはや魔術とは呼べず、『奇跡の結晶』とも呼ばれる代物だそうだ。

「ブーストの3倍の負担。それが魔法の使用中に君の体に襲い掛かる」

「……」

「正直、あまり進めたくはないけどそれしかないの」

「それだけ？」

「ふぇ？」

アリアから素っ頓狂な声が漏れた。

「そ、それだけって！3倍だよ、3倍！今度こそ死んじゃうかも知れないんだよ！？」

「でも、それでみんな助かるんだろう？それに沙耶のためだ」

「……はぁ」

「なんだよ、ため息なんかついて」

「本当に沙耶ちゃんにベタ惚れだよね」

アリアは半ば呆れ気味にそう言うとテレビを見始めた。

アリアの言うとおり、沙耶がこの場にいないのは確かに正解だった。沙耶は優しいから。

ｅｐｉｓｏｄｅ２３―ｄｉｖｅ―

翌朝、アリアの指示に従い川沿いに来ていた。
早速、能力を身に付けるための作業に入るそうだ。

「綺麗な川だねー」

アリアは川を眺めながら笑顔で話す。
周りを見渡すと、まだ通学時間になってないからか人通りは少ない。

「で、今から何するんだ？」

「能力付加に決まってるでしょー」

「いや、具体的に教えてくれよ」

「儀式みたいなもの。これをすればすぐに魔法が使えるようになる」

「マジか！？なんだよ、『能力付加』自体は簡単そうじゃないか」

「フフ……。では、早速始めましょうか」

「……」

な、何だ、あの笑みは。
急に敬語だし……

アリアがしゃがみ込んだ後に地面を叩くように手を当てた。

「は！？」

瞬間、青い光を放つ線が円を描き、俺とアリアを囲う。
そして、そのまま暗闇へと引きずり込まれた。

「ようこそ、『傍観者の世界』へ」

引きずり込まれた先に広がっていたのは、無数の世界の始まりと終わりの映像だった。
正に、無数の世界が渦巻く中心へのダイブ。
脳に直接情報が送られる。
視界が捉えるものは『世界』と『全て』。
自分が神にでもなったような錯覚。
五感全てを使っているのではないか、とも思ってしまう。

「こ……れは……」

次々と送られてくる膨大な情報に、脳が悲鳴をあげ始めた。

「く……ぁ……。いっ、てぇ……」

脳を直接叩かれているような激痛が駆け巡る。
次第に意識が虚ろになり始めた。

「さ……や……？」

閉じかけた瞳の先、最後に見えたのは沙耶だった。

episode24―on―

「おかえりなさい」

俺が目を覚ました時、最初に聞いた言葉がそれだった。

「ア……リア？」

少しずつ脳がすっきりしてくる。

「って、あれ何だったんだ！？」

「いやー、手早く魔法を使えるようにする裏技」

「死ぬかと思ったわ！」

アリアは笑ってるけど本当に死ぬかと思った。

まだ頭に響いてる様な違和感があるし。

「じゃあ早速使ってみようか」

「は？まだ、あんまりわかんな……って、え！？」

不思議な感覚だった。

使い方さえも分からない魔法の仕組みが脳で理解できている。

今、ここにある世界の不安定さも手に取るように感じることができた。

「これなら……」

言葉に表すと、押し戻す感じ。
手をかざし、発動する。

「ここまでは成功」

アリアの言葉と同時に、俺の手から光が発せられた。

「これが、沙耶の使う魔法か……」

いつも見ている光が、自分の手から放たれている。
感慨深いが、やっぱり沙耶の使ってる時の方が綺麗だ。

「と、そろそろ止めた方がいいよ」

「え？……っ！？うぁ……」

魔法を使っていると急に吐き気がしてきた。
その後、鉄の味が少しだけ口の中に広がる。
魔法を停止し、口元まで流れ出てきた血を拭う。

「やっぱりここが限界かー」

アリアはそう言って俺を座らせた。

「良く頑張ったね。おやすみ」

俺は言葉を発することもできず、再び意識を失った。

episode25―immitation―（前書き）

すいません、遅くなりました。
最近忙しかったもので……。
これからは定期的に更新できるようにし……ますですはい。

episode25―immitation―

窓から陽光が差し込んでいる。
虚ろな視界に入る光は、また眠気を誘うような柔らかいものだった。

「そうか……。俺、倒れたんだったな」

四角い空間。
辺りを見渡して自分の部屋だと気付く。

「あ、起きた？」

アリアがドアからひょっこり覗いてくる。

「体の調子はどう？」

「んーーーー」

上体を起こし、体を伸ばす。

「うん、悪くないな！」

「良かった。じゃあ今から沙耶ちゃん家に行くから準備して」

「よし分かった……って、ぇえええ！？」

「ちょっと見せたいものがあるの」

見せたいものって……

「って、ちょっと待て……」

何か引っかかる。

「俺、なんで沙耶の家に行ったことがないんだ？」

母親の話も聞いたし、家庭は普通だって沙耶も言ってたはず。
なんで今まで気にしたことがなかったんだ？

「やっぱり……」

アリアは呆れたように呟いた。

「なんだよ、『やっぱり』って」

「君は『暗示』をかけられていたみたいだね。この世界の魔法でも、それくらいのレベルはあるでしょ？」

確かに。
個人差はあるが、それくらいの暗示魔法ならあるはずだ。

「じゃあ、俺の『意識』が『沙耶の家』に向かないようにされていたのか……」

「その通り」

アリアはにっこりと自慢げに頷く。

「でも、なんでそんなことするんだよ？家庭は普通なんだろ？」
「そんなのは簡単だよ。それを込みで、知られたくないことがあるからでしょ」

※※※

普通の一般住宅――
最初に感じたのはそんな事だった。
周りと何も変わらないタイプの家で、そこにあるの事に何も違和感はない。
そして、横に立っているポストには確かに『神野』と記されている。
「これが沙耶の家……か」
「普通でしょ？」
アリアは、他人の家だという事も気にせずに敷地内へと足を進める。
「な、なぁ、勝手に入っていいのか？」
「いいの。どうせ誰にも分からないんだから」
「？」
アリアはそのまま玄関のドアノブに手を掛けると、真剣な顔付で俺を見た。

「いい？どんなことがあっても沙耶ちゃんに話しかけちゃだめだよ？」

「は、え……、何でだよ？」

「入れば分かる。とにかく『絶対』だからね」

アリアは念を押すように言うと、ドアノブを回してドアを開けた。

中に入ると、沙耶の靴が一足並べてあった。

「こっちね」

どこに行くか決まっていたかの様に足を進めるアリア。

俺は何がなんだか分からないまま着いていくと、リビングらしき一室の前で足を止めた。

「さて、驚くかもしれないけど、絶対に沙耶ちゃんに話しかけちゃ駄目だからね」

アリアはもう一度そう言うと、何も躊躇わずに俺の手を引いてリビングへ進入した。

「――――――――――――！！」

一瞬では気付かなかったが、数秒でその『異常』に気付いた。

リビングにいた『女の子』が、明らかに普通じゃないのだ。

女の子は笑って食事をしていた。

「でね、直樹くんの幼馴染にあったの。綺麗な人だったなー。え？いや、さすがにお母さん相手に敬語はおかしいよー」

いないはずの誰かに向かって話しをしながら。

「ど……うなってんだよ、これは……」

悪夢でも見ているようだった。

笑って、家族と談笑して、夕食を食べて……恐らく沙耶はそうしてるつもりなんだろう。

だけど、それは本当に沙耶だけだった。

俺達には沙耶が1人で騒いでるようにしか見えない。

沙耶は俺たちに全く気付かずに家族との対話を続ける。

「おい……これは一体何なんだよ！！」

俺は思いっきり大声で叫んだが、沙耶の耳にはまるで届いてないようだった。

「ただ簡単に暗示と言うには軽すぎるね……。強力な催眠術か脳改造か、はたまた、この家自体が『異空間』になっているのか。まぁたぶん場所限定の催眠術かな。この世界に空間操作なんてできる人間はいないから」

アリアは冷静に状況を観察し、分析していた。

俺なんか何も頭に入らないのに。

「ねえ」

「？」

「ショックなのは分かるけど、まだ気付かない？」

「え……？」

「仮想の両親が沙耶ちゃんには見えている……。誰かは知らないけど、それを見せる理由は何？」

「まさか！？」

アリアは何も隠そうとはせず、ただ作業的に述べた。

――――そう、沙耶ちゃんの両親はね、もういないんだよ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7071f/

少女の咎と世界

2010年10月9日18時29分発行